

未就園児の「親子貼り絵遊び（コラージュ）」の試み

ー 制作過程と母親の関わり方の発達的特徴 ー

前田起代栄*・岡田 珠江**

本研究は、未就園児の親子を対象に育児サークルで「親子貼り絵遊び（コラージュ）」を試行し、作品と制作過程、母親の関わりについて発達の視点から検討するとともに、未就園の親子に実施する意義について検討した。制作過程や作品には発達段階ごとの特徴がみられ、3 歳代までは母親が補助をし、子どもに関心を向けていることが必要だが、4 歳代では必ずしもそれらが必要でないことがわかった。また 3 歳代前半までは、「好きなものをたくさん貼る」ことを楽しむ子どもが多いが、子どもによっては 2 歳代後半より「見立て・つもり遊び」を表現し、3 歳代後半以降は、イメージの世界を表現する子どもがあることがわかった。貼り絵遊びを未就園児の親子が実施することは、子どもが家庭ではあまり経験しない表現遊びを体験できるとともに、保護者も子どもとの関わり方を再発見する機会にもなりうるということがわかった。

キーワード：未就園児、親子貼り絵遊び（コラージュ）、発達による特徴

1. 問題意識と目的

「コラージュ」は写真や絵や文字を雑誌や新聞などから切り抜き、台紙に貼って作品にするもので、20 世紀初頭に生まれた美術の表現方法である（杉浦,1998）。コラージュは心理療法や教育における自己啓発、美術教育など様々な場面で用いられている。

コラージュは、幼児から高齢者まで実施が可能とされているが、幼児のコラージュに関する文献の数は多くなく、いずれも幼稚園児・保育園児を対象にしており、1,2 歳の未就園児が対象のものはみられない。

就園児と未就園児の相違点は、園では子どもの成長・発達を考慮した計画に添って保育がなされるが、未就園児では、保護者の養育態度や嗜好、生活スタイルによって、日常の過ごし方や遊びの内容が偏る傾向があることである。このようなことから、未就園児が貼り絵遊び（コラージュ）を行った場合には、経験に差異があることが考えられる。また、年齢幅が広いため、発達段階によっては、制作過程において子ども自身の力で実施可能なことと保護者の関わりが必要になることが推測される。

そこで本研究では未就園児の親子を対象に「貼り絵遊び（コラージュ）」を導入し、出来上がった作品とその制作過程、母親の関わり方を発達の視点から、年齢ごとの特徴を検討する。また、未就園児の親子が貼り絵遊びをする経験にどのような意義があるかについても検討する。検討は制作過程の録画ビデオと作品の撮影写真、保護者に実施したアンケートを元に貼り絵遊びの遊び方や

画用紙の使い方、母親の関わり方の視点から行う。

2. 方 法

1) 協力者

三重県内の 3 つの育児サークルに自主的に参加した 1 歳 8 カ月～4 歳 7 カ月の幼児とその母親合計 19 組である（表 1 参照）。

表 1 年齢ごとの協力者内訳

年齢（歳：ヶ月）	男児（人）	女児（人）	合計（人）
1：6～1：11	0	1	1
2：0～2：5	0	2	2
2：6～2：11	4	2	6
3：0～3：5	0	3	3
3：6～3：11	0	4	4
4：0～4：5	0	1	1
4：6～4：11	0	2	2
合計（人）	4	15	19

2) 実施時期

各サークルとも 2008 年 12 月～2009 年 2 月の間に、約 1 カ月の間隔をおいて 2 回ずつ実践した。¹⁾

3) 準備物

34 cm×27 cm×6 cm 大のコラージュボックス 4 箱（チラシは幼児向けアニメ・番組のキャラクター、動物、乗り物、食物、その他万遍なく筆者がチラシを選択し、作成する。以下ボックスと記す。）ボックスは 3 組の親子に対して 1 箱配布する。学童用ハサミ、でんぷん糊、

* 津市立千里ヶ丘小学校

** 三重大大学教育学部附属教育実践総合センター

4つ切り・8つ切り画用紙、16色クレヨン、筆者制作の
教示用紙芝居（各会場で初回時のみ使用）

4) 実施の手順

- ① 各会場の初回は、筆者制作の教示用紙芝居を用いて
教示をし、毎回同じ音楽をBGMとして流す。
- ② 基本的には子どもが主体的に制作を行い、ハサミの
使用等、技術面で必要な場合は保護者が補助をしてほ
しいことを補足説明する。
- ③ クレヨンの使用は自由に行うものとし、強制しない。
- ④ 筆者は、制作中はフロア内を万遍なく巡視し、子ども
が遊びとして楽しむことができるよう、声かけをする。
- ⑤ 制作過程をビデオ録画し、作品の写真撮影をする。
- ⑥ 保護者²⁾に対してアンケートを実施する。

なお、貼り絵遊びを実施するにあたっては、親子で取
り組み、楽しめる時間となるようにした。

3. 結果と考察

1) 事例から見る年齢ごとの遊び方の特徴

本論では各年齢に典型的な事例を提示し、貼り絵遊び
の作品、制作過程、母親の関わり方の特徴を述べる。子
どもの名前は全て仮名で記載をする。

(1) 1歳代後半の特徴

【事例1：くるみ（1：8）】

「切り抜きに糊づけをして貼る」よりも、本児が選
んだアイテムを母親が切り抜き、それを手にして喜ん
だり、車の切り抜きを玩具の車の様に走らせたりして
遊ぶ。母親にアイテム選びを促されると、短時間で目
に付いたチラシを持ってくる。チラシの中からどのア
イテムがよいか、母親に尋ねられると指差しで答える。
母親に貼り付けを促されると、糊づけしないまま貼ろ
うとしたり、切り抜きの表面（通常裏面）に糊づけし
たりする。お気に入りのアイテムが見えなくなるよう
な重ね貼りをすることもある（作品1）。「選ぶ、切る、
糊づけする、貼る」の、どの過程にも母親の声かけと
補助が必要だが、母親の意図する遊びと異なる遊び方
をすることがある。

本児は、家ではお絵描き等の表現遊びを好んでして
いない。

【1歳代後半の特徴】

「選んで貼る」よりも、お気に入りのアイテムを見
たり手にしたりして喜ぶことがある。アイテム選びや
貼り付けには、母親の指示や声かけが必要である。

- ① **アイテムの選び方**：母親に促されると、5秒程度で
チラシを選ぶ。その中からどのアイテムがよいか母親
に尋ねられると、指差しをする。
- ② **切り方**：ハサミで切り抜くことができない発達段階
のため、子どもが指差したものを母親が切り抜く。
- ③ **貼り付け方**：糊づけの必要性や意味を理解するこ
とが難しい。母親に指示されると貼るが、言われたまま
に行動して、お気に入りのアイテムが見えなくなる重

ね貼りをすることもある。

④ **母親の関わり**：「選ぶ・切る・糊づけ・貼る」の、
どの過程でも、母親が1つ1つ子どもの意向を聞き、
指示・補助をする。子どもは母親の声かけと異なる遊
びをすることもある。

(2) 2歳代前半の特徴

【事例2 さや（2：3）】

飽きることなく、画用紙に向かって制作をする。ア
イテム選びは母親と行い、たくさん選んだチラシの中
から好きなアイテムを選ぶ。切り抜き作業では当初、
母親は子どもがチラシを持つ手とハサミを持つ手の双
方に手を添えながら切る。途中で子どもが自分で切り
たいと意志表示をしたため、母親がチラシを持って、
子どもが切り抜く。糊づけ作業では、母親が糊をのば
すよう促しても、糊をのばすことができず、母親と行
う。画用紙の空いた箇所に貼る工夫は可能だが、切り
抜きが様々な方向を向き、画用紙の天地を意識してい
ない。好きなものを切って貼ることを楽しむが、どこ
に何を貼り、どのような作品にするか思い描いて制作
する発達段階ではない。

本児は家でも、お絵描きやハサミを用いる遊びを好
んでいる。

【2歳代前半の特徴】

どの過程にも、母親が丁寧に関わると、「好きなも
のを貼る」ことを楽しむ。画用紙の天地を意識して制
作しないが、画用紙の空いた箇所に貼る工夫をする。

- ① **アイテムの選び方**：母親が子どもの意向を聞き、子
どもは好きなアイテムを選ぶ。
- ② **切り方**：母親が切るか、母親がチラシとハサミの双
方に手を添えるなどの補助が必要である。
- ③ **貼り付け方**：子どもだけで糊をのばすことは困難で
ある。画用紙の空いた箇所に貼る工夫をするため、重
ね貼りでアイテムが見えなくなることがない。
- ④ **母親の関わり**：本人の意向を聞き、「選ぶ・切る・
糊づけ・貼る」の、どの過程にも母親が丁寧に声かけ
や補助、教えながら関わると、子どもが「遊び」とし
て楽しむ。

(3) 2歳代後半の特徴

【事例3：マイク（2：9）】

本児は母親が丁寧に関わることで貼り絵遊びを楽し
む。母親がアイテム選びを促すとすぐ、男児がよく好
む正義のヒーローのチラシを選ぶ。本児は制作当初は
母親と切り抜き作業をするが、すぐに母親に任せる。
本児だけの力で切り抜き全体に糊をのばすことは困難
で、母親と糊づけを行う。貼り付けの際は、本児の手
の近くに貼るが、画用紙が切り抜きで覆われるにした
がって、画用紙の空いた箇所に貼る。また、ヒーロー
の切り抜きの口元にハンバーガーの切り抜きを重ね貼
りし、「ヒーローにハンバーガーを食べさせる」と言
う。「みたくて遊び」の結果、重ね貼りが生じる（作品
2）。画用紙の天地を意識して制作していないため、切
り抜きが様々な方向を向いている。

本児は、家でもお絵描き等の表現遊びを好んでいる。

【2 歳代後半の特徴】

母親が傍で見守り、声をかけ、主に「切る」「糊づけ」の補助をすることで遊びを楽しむ。作品の中で、好きなキャラクターを使って「見立て遊び」をすることがある。

- ①アイテムの選び方：母親と一緒にでなくとも選ぶことが可能だが、目に入った好きなものを短時間で選ぶ。
- ②切り方：母親が切る、又は母親がチラシやハサミに手を添えながら子どもが切る。
- ③貼り付け方：子どもだけの力で切り抜き全体に糊をのぼすことは困難である。画用紙の空いた箇所に貼る工夫をするため、重ね貼りは存在するが、アイテムが見えなくなることはない。画用紙の天地を意識して貼らない。
- ④母親の関わり：どの過程にも母親の見守りや声かけが必要で、「切る」「糊づけ」では技術的な補助が必要になる。

親の傍らで集中して制作するが、時折母親に声をかけて制作を依頼する場面がある。

本児は、家でもお絵描き等の表現遊びが好きである。

【3 歳代後半の特徴】

技術的にはほぼ子どもの力で制作が可能だが、母親の関心が向けられている必要がある。また、画用紙の天地を意識して制作をし、イメージの世界が現れる子どもも出てくる。

- ①アイテムの選び方：子ども自身の力で選び、かつ比較的時間をかけて、ある程度吟味して選ぶ。
- ②切り方：母親がチラシを持つとスムーズに切るが、自分で切り抜くことが可能な子どももある。
- ③貼り付け方：子どもの力で切り抜き全体に糊をのぼすことが可能である。画用紙の天地を意識して貼る。
- ④母親の関わり：技術的な面では制作過程への補助はあまり必要ないが、母親の関心を惹こうとする。

(4) 3 歳代前半の特徴

【事例 4：レイ（3：2）】

アイテム選びでは、よく考えてチラシを持ってくるというよりは、目に付いた馴染みのあるキャラクターを持ってくる。切り抜き作業は、前半は母親にチラシを持ってもらいながら行う。後半は右手にハサミを持ち、左手で少しずつチラシの向きを変えながら切る。糊づけは、約 5 cm 四方の切り抜きであれば、子どもの力で隅々まで糊をのぼすことができる。切り抜きアイテムや描いた絵が様々な方向を向き、天地を意識して制作しない。拙いながらも「選ぶ、切り抜く、糊づけ、貼る」作業は本児の力で行うことが多いが、母親の関心を何度も惹こうとする言動が見られる。

本児は家でも、お絵描きを好んでしている。

【3 歳代前半の特徴】

母親が切るのを手伝い、関心が子どもに向けられていることで制作が進む。画用紙の天地を意識して制作をしていない。

- ①アイテムの選び方：子ども自身が好きなアイテムを選ぶが、時間をかけてじっくり選んでいる訳ではない。
- ②切り方：母親にチラシを持ってもらって子どもが切る、または母親が切る。
- ③貼り付け方：約 5 cm 四方の切り抜きであれば、子どもの力で糊を全体にのぼすことができる。画用紙の空いた箇所に貼るが、天地を意識して制作しない。
- ④母親の関わり：切る作業以外は補助があまり必要ないが、子どもは何度も母親の関心を惹こうとする。

(6) 4 歳代の特徴

【事例 6：いり（4：6）】

本児自身の力で制作し、母親は少し離れたところで見守る。アイテムを選ぶ時には、欲しいアイテムを選ぶために、複数のボックスを探る。切り抜きの際は、片方の手でハサミを持ち、もう片方の手でチラシを持ち替えながら切り抜きを行う。糊づけ作業も、本児の力で切り抜き全体に糊をのぼすことができる。貼り付ける時には、画用紙の天地を意識して貼る。重ね貼りをせざるを得ない箇所では、欲しいアイテムが見えなくならないよう、慎重に貼る。クレヨンで空いた箇所をピンク色に塗色し、最後に短時間で画用紙の裏側に目、口、頭髮、胴体、手、足のある女の子の絵を描く。

本児は、家でもお絵描き遊びが好きである。

【4 歳代の特徴】

1 人での制作が可能になり、画用紙の天地を意識した作品を作る。また、イメージの世界を表現する子どももある。

- ①アイテムの選び方：子ども自身の考えでボックスの中を探り、時間をかける。欲しいアイテムを求めて、複数のボックスを探ることもある。
- ②切り方：子どもの力で切り抜くことができる。
- ③貼り付け方：子どもの力で、切り抜き全体に糊をのぼすことができる。画用紙の天地を意識して貼る。
- ④母親の関わり：母親による補助や励まし、積極的な関心が向けられていなくても制作が可能である。

(5) 3 歳代後半の特徴

【事例 5：りん（3：9）】

アイテム選びの際には欲しい物を探すために、複数のボックスにチラシを探しに行くこともある。ハサミや糊、クレヨンを巧みに使用しながら、本児の力で作業をする。本児は机の切り抜きを貼った後で、クレヨンで猫のキャラクターを描き、机の切り抜きの上に食物の切り抜きを貼る。また、クレヨンで太陽や空、草、蝶々を描き足し、「“キティちゃん”がお弁当を食べている」と話す（作品 3）。他児の母親と会話をする母

2) 貼り絵遊びに見られる遊び方の発達

「1) 事例から見られる年齢ごとの遊び方の特徴」から見た結果より、貼り絵遊びに見られる遊び方の発達について考察する。

(1) アイテムの選び方

3 歳代前半までの子ども達は、あまり時間をかけずにチラシを選ぶ傾向にある。吟味して選ぶと言うよりは目にしたもの、興味を惹かれたものを選んでいて、あると考える。その一方で、3 歳代後半以降の子ども達は、アイテム選びに時間をかける傾向にある。ある程度欲しい

いアイテムを探すための行動であろう。4歳児では「何を作ろうと言う意図に基づいて表現方法を選び始める」（白石・白石，2009）年齢であるために、4歳に近い子どもは自分が作りたいものを思い描き、それに合うアイテムを求めて行動している所以であると考えられる。

（2）切り方

1歳代の事例1くるみ（1：8）は、ハサミを使用することができない。事例2さや（2：3）は母親の補助を受けながら、事例3マイク（2：9）は、初めだけ母親の補助を受けて切り抜きを行い、後は母親に任せている。

一般的に2歳代では、「一回切り」（ハサミの刃を一回だけ動かして切る切り方）が可能になる。3歳時期ではハサミで直線を切ることが可能になり、4歳時期ではハサミを連続で動かして切りながら、もう片方の手で切り抜いている紙の向きを変えることが可能になる。

貼り絵遊びでは、連続してハサミを動かして切り抜く必要がある。上記のような発達的特徴から、2歳代の子どもでは母親が切り抜く、子どもの左右の手に母親が手を添えるなどの補助が必要となる。事例2さや（2：3）が、一般的な2歳児よりもハサミの使用が進んでいるのは、家庭でハサミを用いた遊びをしていることと関係しているだろう。事例4レイ（3：2）、事例5りん（3：9）らも、一般的な3歳児に比べて、ハサミの使い方が進んでおり、家庭での経験が関連していると推測する。また事例6いり（4：6）は、一般的なハサミの使用に関する発達と合致しているといえよう。

（3）貼りつけ方

本研究における1歳代の事例では、母親の言葉に従って貼り付けをしている。そのため、お気に入りのアイテムがほとんど見えなくなるような重ね貼りをすることもあがあるが、2歳代以降になると貼り方に工夫が見られる。貼る際に自分の手の近くから貼り、切り抜きて画用紙が覆われるにしたがって、画用紙の空いた箇所に貼る。アイテムがほとんど見えなくなるような重ね貼りはしない。3歳代後半以降になると、事例6いり（4：6）のように、重ね貼りをせざるをえない時に、好きなアイテムができるだけ見えなくならないよう、慎重に貼る。

また、事例3マイク（2：9）は「ヒーローにハンバーガーを食べさせる」、という「見立て遊び」の結果、重ね貼りが生じている。事例5りん（3：9）も、机の切り抜きの上に食べ物を貼り、「“キティちゃん”がお弁当を食べている」と話す。このように、イメージの世界を表現するために重ね貼りをする例も見られる。こうした表現が可能なのは、事例3マイク（2：9）や事例5りん（3：9）の家庭でのお絵描き等の表現遊びの経験と関連があるだろう。

小倉（2006）は、保育園の年中児を対象に行ったカラーージュにおいて、「ファンタジーが生み出された」と述べ

ている。本研究では、イメージの世界の始まりである「見立て・つもり遊び」を作品の中で表現する子どもが2歳代後半以降に見られ、イメージの世界を表現する子どもは3歳代後半以降に見られた。日ごろの表現遊びの経験によっては、2歳代後半の子どもでも、このような内的世界を貼り絵遊びの中で表現することが可能になると推測される。

（4）画用紙の使い方

3歳代前半までは、切り抜きや描いた絵の向きが様々な方向を向いている。手先の発達が未分化であることや、画用紙の天地を意識して制作することができない発達段階にあるためであろう。3歳代後半以降は画用紙の天地を意識して制作しており、切り抜きや絵が様々な向きを向いていない。これは、子どもの絵の発達段階と関連があると考えられる。絵画の発達は若杉（1998）によると、なぐりがき期、象徴期、前図式期、図式期の順に発達する。子どもは1歳頃からなぐり描きなどを通して絵を描くが、前図式期までは1つの空間として画面を統合し、組み立てる意図はなく、描かれた個々の形がつながりをもたない。図式期以降は、絵画的空間として1枚の絵が表現されるようになるという。上記のことを参考にすると、本研究における事例では、3歳代前半までは、1つの空間として画面を組み立てておらず、画用紙の天地を意識せずに貼ったり描いたりしている。これは、絵の発達段階としては前図式期までに属すると考える。その一方で3歳代後半以降では、事例5りん（3：9）の作品のように、太陽や草がみられ、登場人物が情緒的つながりを持ち、画面を1つの空間として組み立てている。これは、図式期の作品と一致すると考えられる。事例6いり（4：6）の作品の表面では、事例5りん（3：9）のような特徴は見られないが、裏面に描いた絵は、頭足人ではない、胴体のある図式期の特徴を持つ絵である。上記のようなことから貼り絵遊びにおいても、図式期に属する子どもの作品は、画用紙の天地を意識して制作していると考えられる。

（5）母親の関わり方

母親の関わり方は、年齢とともに関与の仕方が変わる。1歳代では「選ぶ、切る、糊づけ、貼る」のどの過程でも、母親は1つ1つ子どもの意向を聞き、補助や声かけをしているが、母親の言葉と異なる遊びをすることもある。2歳代では、母親が子どもの意向を尊重しながら丁寧に関わり、主に「切る、糊づけ」作業で補助をすると、子どもが貼り絵遊びを楽しむ。3歳代では「切る、糊づけ」などの技術的な補助を、2歳代の子どもほど多く行う必要はないが、子どもが母親の関心を惹こうとする言動をとり、4歳代では母親の補助や積極的な関心が向けられていなくても、貼り絵遊びが可能になってくる。

貼り絵遊びは、「選ぶ⇒切る⇒糊づけ⇒貼る」という

4つの流れのある遊びである。一般的に、2歳代では「…してから…する。」という2単位以上の思考を内化していく段階である。そのため、1歳代後半では、母親の発する「選ぶ」「貼る」という1つ1つの言葉を理解し、それに即した行動を取ることは可能だが、「選んで糊づけをして貼る」という、2単位以上の指示を理解することが困難である。したがって、母親が1つ1つ子どもの意向を確認し、声かけをする必要があるのだろう。2歳代の子どもでは、母親が子どもの意向を尊重しながら補助をすることで、貼り絵遊びの一連の流れを理解し、遊びを楽しむことが可能になるのだろう。

また、3歳代では子どもの力で可能な面が増えるが、母親の関心が向けられていることを求め、4歳代では必ずしも、母親の積極的な関心が向けられていなくとも制作が可能となる。このことが、3歳代と4歳代の子どもの相違点といえよう。これはマラー（M. S. Mahler）の指摘する、感情的対象恒常性が成立しているかどうかの違いではないかと考える。感情的対象恒常性は満3歳以降に確立するといわれており、母親が物理的に不在の時にも、心の世界に母親の存在を思い浮かべられるようになるのだが、それはある程度の恒常性と持続性を持つことである。母親の関心が子どもの制作に向いていない、心理的に不在の場合には、3歳代の子どもでは母親の注意・関心を惹きたくなるのだろう。

3) 未就園児に貼り絵遊びを導入する意義について

本研究におけるアンケートの「作品の扱い」に関する項目では、作品を「家の中に貼ってほしい」「家族に見せる。」と発言している子どもが約半数見られる（図1）。

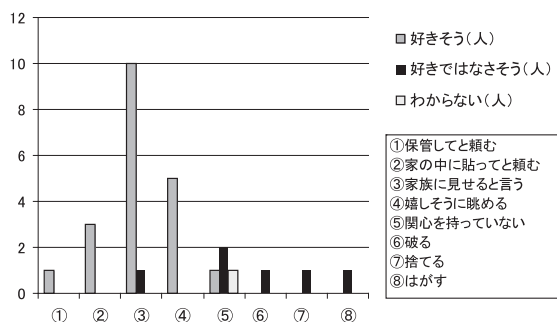


図1 作品の扱いについて（複数回答有り）

保護者と作った作品を家の中に貼ったり、家族に見せたりすることは、子どもの「家族に褒めてもらいたい」「楽しかった経験を家族と共有したい」という気持ちの表れだろう。また作品を家の中に貼り、それを度々見ることは、帰宅後も楽しかった経験を想起することが可能になる。このような体験は、子どもにとって喜びを感じる、親しい人とのコミュニケーションであり、自分を理解され受容される体験になりうるだろう。言い換えれば、

貼り絵遊びは子どもの心の発達を促す遊びにもなりうると思う。

また、保護者に対するアンケートの自由記述欄には次のような意見が多くみられた。

- なかなか子どもと向き合って遊ぶことをしなかったのも、このような時間がもてよかった。
- 家庭では、ゴミが出るのであまりこのような遊びはさせない。
- シートなど敷いてもらい、好きに、自由にと言われたので、私の方も自由に見守ることができました。やはり家では汚れては嫌なところでしたりしていると口が出てしまいます。する時の環境が大切だと感じました。
- 家ではリップタイプの糊しか使っていなかったのも、指で広げて塗るのが楽しそうだった。ハサミより糊を塗る方が楽しそうだった。家ではゴミが出るし、あまりさせないけど、楽しくやっていたので、家でやらせてもいいかなと思った。

資料1 保護者の自由記述（保護者の記述通り）

上記のように、親子で貼り絵遊びを行うことは母親が子どもに口出しするのではなく、子どもがすることを見守る、親が子どもと向き合って遊ぶ等の家庭とは異なる関わり方をする機会にもなりうる。つまり、貼り絵遊びを通して、親が子どもへの関わり方を振り返ったり再発見をしたりする機会にもなりうると思う。また子どもによっては日ごろあまり使うことのない、でんぶん糊やクレヨン、ハサミなどを用いて遊び、手でそれらの感触を味わうことで、遊びの幅が広がる機会になったと思われる。そのため、このように家庭であまり体験しない表現遊びを未就園児が体験することは、意義があると思う。

その一方で、本論の事例に提示していないものの中で、少数であるが、2歳代までの子どもの中には貼り絵遊びを中断する事例も見られた。これは、保護者の姿勢や子どもの集中力の持続が容易ではないことと関係しており、2歳以下の子どもにコラージュを施行することは必ずしも容易ではないことが確認された。2歳以下の子どもにコラージュを導入した先行研究が少ないことは、上記の要因も関連していると思う。

4. まとめ

本研究では、未就園児の親子を対象に「親子貼り絵遊び（コラージュ）」を試行し、作品と制作過程、母親の関わりについて発達の視点から検討するとともに、未就園児の親子に実施する意義について検討した。貼り絵遊びの制作過程では、遊び方や母親の関わり方に年齢ごとの発達的特徴がみられた。また、3歳代前半までの子どもの多くは「好きなものを貼る」ことを楽しむ傾向にある。そして、日頃の表現遊びの経験によって、2歳代後

半で「見立て・つもり遊び」を、3歳代後半以降で、イメージの世界を表現する子どもが見られる。このように、同じ手段を用いても、年齢や日頃の経験によって表現される内容や意味が異なることも「貼り絵遊び」の発達による特徴であろう。

参加した子ども達の多くは、「貼り絵遊び」を楽しみ、作品を大切に持ち帰った。帰宅後も家族とすることについて対話することは、子どもにとって喜びを感じる体験となり、母親にとっても子どもとの関わり方を再発見する機会になり、親子にとって意義ある遊びになると考える。従来、集団では4歳から可能であるとされていたコラージュが、保護者の関わり方次第では2歳代でも「遊び」として楽しむことも可能である。しかし、その補助や支援の方法には工夫が必要である。

今後の課題としては、各発達段階における事例を多く検討し、年齢ごとの特徴や、日頃の表現遊びの経験との関係をより客観的な視点で明らかにする必要があるだろう。

注

- 1) 体調不良や保護者の都合でサークルを欠席する協力者が出ることを想定して、2回ずつ試行した。
- 2) 本研究の協力者の保護者が全て母親であったため、本稿では保護者を母親と記載した。
- 3) 本稿は、筆者の書いた「未就園の親子貼り絵遊び」平成21年度修士論文を加筆修正したものである。

引用・参考文献

- 1) 杉浦京子, コラージュ療法—基礎的研究と実際 (川島書店), 3-124, 1998
- 2) 白石正久・白石恵理子編, 教育と保育のための発達診断 (全国障害者発達問題研究会出版部), 98-136, 2009
- 3) 小倉明子, 園児のコラージュ (はっつけ絵遊び) の可能性, 三重大学大学院教育学研究科平成18年度修士論文, 40, 2006
- 4) 若杉雅夫, 幼児の絵の発達段階とその援助と指導について (東海女子短期大学紀要) 第24号, 147-157, 1998



作品1 くるみ (1:8)

重ね貼りでお気に入りのアイテムが見えない。



作品2 マイク (2:9)

切り抜きが様々な方向を向いている。

ヒーローの口元にハンバーガーの切り抜きを貼る。



作品3 りん (3:9)

切り抜きや絵が同方向で、天地を意識している。

机の切り抜きの上に、食物の切り抜きを貼る。